

## 第2回 アートインビジネス研究会 要旨

### 『香が語る日本文化の本質』

日時：2024年9月13日 18:00～

講師：「松栄堂」代表取締役社長 畑 正高（はた まさたか）氏

場所：「松栄堂」京都本店・薰習館

本講演は、2024年9月13日に松栄堂の代表取締役社長・畠正高氏が京都本店で行った「香が語る日本文化の本質」と題した講演の議事録である。日本の伝統的な香文化を通じて、日本文化の歴史的背景や精神性を深く探求し、聞香（もんこう）という香りを鑑賞する芸道の実演を交えて解説している。

また、香りを媒介にした日本文化の歴史的・社会的な背景と、聞香の繊細な技術と精神性を包括的に伝え、参加者に日本の香文化の本質を体感させる貴重な機会となった。

### 日本の香文化の三つの世界

日本の香文化は大きく三つの世界に分けられる。まず「薰物（たきもの）」の世界で、これは平安時代の和様文化の象徴であり、複数の香料を配合して香りを整える技術が特徴である。基本がきちんとあり、それに基づいてやっているが、どこまで行っても基本のレシピに基づいたものは基本的なものなので、それを2回、3回、4回と繰り返してやる中で、アレンジメントということが起こる。あるいは季節が変わると材料も変わり、最初学んだレシピは分かっているけれどもその通りの材料が揃わないなど、様々な制約の中でアレンジメントとか工夫とか知恵が備わっていく。あるいは他の人の経験なんかも折り込まれていくという風なことで、レベルの高いものに発展していく。

こうした同じことが聖徳太子の時代から遣隋使や遣唐使を通じて中国大陆の影響（唐様）を受けつつも続いてきて、独自の和様文化として成熟した。これが900年ぐらいのこと。それからまた100年経って王朝文学の世界。まさに薰物、日本の香りはその時代に大陸から学んだ教養文化として学んだものが、最終的にはこの国の人たちの麗しい生活文化として展開されるようになったと言える。

第二に、室町時代の東山文化における聞香の世界がある。1300年代の京都。婆娑羅（バサラ）という人たちが京都の街で風を切って、という時代。その中には佐々木道誉（どうよ）という風な、後の時代に名を残した美意識の強かった人たちも登場する。応仁の乱後の混乱期を経て、武家や町衆を含む多様な人々が文化的教養をもって寄り合い、茶の湯や連歌、作庭と共に聞香が交流の潤滑油として機能した。聞香は天然の香木の個性を鑑賞し、精神的な交流を促進した。

平安時代の様々な色を使って色彩豊かに描かれた彩色豊かな絵画の世界が、この頃になると水墨画、墨一色で、色がないのに色が見える、見たことがないのに、みんなが共有できる。そして墨色も見せないのでその色が見えてしまうという、そういうアブストラクトな世界が聞香を通して展開されたのではないか。

このお香の世界は何が起こったかというと、広間で貴重な天然の香木を火にかけるのに、いかに日常的な空気の中で1人ひとりはその顔に向き合うかという、そういう真・行・草で言うと真の世界である。茶の湯は草の世界に昇華していった。実はそれを担っていた同じ人たちがやっている。山上宗二記（やまのうえそうじき）という有名な茶書があるが、千利休はその山上宗二に「十炷（ちゅう）の香ならびに追加の六種」として16種の香木こそきちっと学びなさい、とそういう言葉で指導している。だから茶の湯の人は茶の湯のことをし、香の人が香のことをしたのではなくて、茶の湯の人も香のことを勉強しという風に、そういうことが行われたのが東山から千利休までの時代であった。

そのような中で、最終的に聞香ということで香木を評価する、香木の香りに向き合う、天然の香りに向き合うということは、その香りに向き合った自分自身の美意識とか価値観とかそういうものを表現するのに、王朝の時代の人々の教養文化を紐解くわけです。それがいわゆる様々な文学的な表現、言葉に繋がっていくわけである。古今集などの歌とういうものがキーワードになっていく。そんな風に、その薫物と聞香という風なことが2つの世界として、お香の世界では成立し、それが茶の湯の世界では今では夏の香りはその香木、冬の香りは薫物、そういう風な大きな違う香りの世界を使いこなすという、という生活文化が生まれたわけである。

三つ目は江戸時代に伝わった線香文化で、火の扱いが難しい社会で火種を安全に移動させたり、時間計測の役割を果たすなど社会的な革新をもたらした。これは現在のスマホに匹敵するような大きなイノベーション。これにより香料の練り込み技術も発展し、現代の香文化の基盤となった。

### 香木の個性と聞香の鑑賞法

聞香に用いる香木は天然素材であり、その香りの生成過程や配合は完全には解明されていない。香木には固有の名前（銘）が与えられ、世代を超えて大切に継承される。香木の香りは時間とともに変化し、その「ミドルノート」「ラストノート」を楽しむ鑑賞法もある。聞香の際は香炉の灰や炭の扱いが極めて重要で、香りの個性を損なわないように丁寧に火加減を調整する。

また、聞香は単なる香りの鑑賞にとどまらず、連歌や組香といった文化的遊戯としても楽しめ、参加者が香木の名前を伝え合いながら季節感や情緒を共有する社会的行為である。

### 日本文化の精神性と香の役割

香りは日本文化における人ととの距離を調整し、豊かな情緒を生み出す重要な要素である。平安時代の貴族は香りを通じて季節や人間関係を彩り、室町時代以降は禅の精神と

結びついて、天然の香木の中に自身の内面や仏性を見出す文化が育まれた。

また、香文化は和様と唐様という二つの文化的流れの融合の中で発展し、漢字文化や建築美術、祭祀など日本の伝統的美意識の根底に流れている。金閣や銀閣の建築に象徴されるように、権力者の精神性の表現としても香木やその文化は位置づけられている。

また、唐様と和様と簡単に言いうが、唐様が終わって和様が来るといいのではなく、実はこの21世紀の今も唐様というのは脈々と続いているのである。

### 香文化の歴史的背景と社会的影響

応仁の乱や室町時代の社会変動は香文化の変容に大きな影響を与えた。戦乱の混乱期を経て、堺の都市国家や琉球王国が東アジアの海洋ネットワークの中で香木や香料の流通を促進し、16世紀以降の文化復興に寄与した。

織田信長が正倉院の「蘭奢待」を切り取った歴史的事件は、香木の価値と権威の象徴性を示す重要なエピソードである。信長はこれを通じて自身の権力を誇示し、茶の湯文化の発展にも影響を与えた。

### 西洋との香文化の違い

日本の香文化は湿度の高い島国の自然環境や生活文化に根ざしており、木質の香りが日本人の体質に合っていると考えられている。一方、西洋では香料は主に香辛料としての用途が重視され、沈香などの木質香料はあまり注目されなかった。こうした違いは生活様式や気候、文化的価値観の差異に起因している。

### 聞香の実演と体験

講演の後半では、実際に聞香の準備や香炉の扱い方の説明があり、参加者が天然の香木の香りを順に鑑賞する体験が行われた。香炉の灰の扱い方や香木の割り方、火の調整など、聞香の繊細な技術が紹介され、香りの個性を尊重する姿勢が強調された。